

21 年を振り返って

愛媛頸髄損傷者連絡会 鈴木 太

私が受傷したのは 21 年前の事。19 歳の春、当時は何が起こったかわからず、ただただ病院のベッドで寝て時間が過ぎれば元の生活が戻ってくると信じていました。

急性期愛知県での呼吸器離脱に向けたリハビリを 7 か月、大阪府での在宅に向けた家族とともにリハビリを 7 か月、愛媛県に帰り家の改修が終わるまでのリハビリを 4 か月受けて実家に戻りました。状況は受傷直後に思い描いていたものとは全く違う状況でした。全く動かなかった体は右手で電動車椅子を操作できるぐらいになりましたが、首から下の感覚・便意・尿意などは何も変わりませんでした。薄々気付きながらも、担当の医者から今後体の状況と方向性を聞かされた時は表現できない悲しみと絶望感でした。

それから 21 年が経ち、家庭を持ち息子三人と過ごす生活が今の毎日です。毎日いろいろなことが起こりますが、刺激的な毎日です。でも振り返ると本当に様々な方々との出会いがあり、その方々に支えられて今があると感じます。

私にとって最大の出会いは、大阪でのリハビリ中に会った S さんとの出会いです。通院で病院に通ってきている際に声をかけられました。同じ年齢の時に同じスポーツでの受傷ということもあり、いつの間にか先輩後輩の様になっていました。症状も近く質問することにはほとんど答えてくれる頼もしい先輩です。少し打ち解けたかと思うと、ステーキを食べに行こうと誘われました。車椅子での外出に躊躇していても、そこは先輩絶対？のスポーツの関係で話はどんどん進んでいきました。次はカラオケ、人工呼吸器が外れて数か月のどう発声していいかわからない時期に、どうしていいかわからない数時間でした。それも、階段しかない 2 階のカラオケボックスへ担ぎ上げられていました。そして家への招待。入った家には衝撃的な光景が……、一人でいらっしやいました。そして握りずしが準備されていました。もう正直何でもありなのだと感じた出会いでした。この経

験で私には光が差ししました。あそこまで行けるんだ！あそこに近づくとなんか生きていけそうな気がする！と強く思ったのを覚えています。

その後、地元での頸髄損傷者連絡会との出会い。誘われるがままに 2005 年、兵庫県神戸市舞子で開かれた全国頸髄損傷者連絡会全国総会兵庫大会に右も左もわからず参加しました。言っていることもわからずシンポジウムへ参加し、車椅子の多さと初参加の疲れでぐったりして帰ってきたのは覚えています。そしてその後、愛知大会へ学生時代の友人と会うついでに参加。神奈川大会へは横浜という響きにひかれて参加。不純な参加理由ながら、我が家の年間行事へ組み込まれていきました。そこで出会う頸損者は、誰もが毎日を楽しみ充実した日々を送る方々ばかりでした。

地元での大きな出会いもありました。生きていけそうだと思えたのは大阪だからで、当時愛媛に帰ると、ヘルパー派遣さえままならない状況でした。それは数年間も続き、家族・親族・友人との接点だけが続く世界の生活でした。そんな中、障害者自立支援法施行に合わせたヘルパー事業所の開所がありました。こんなに自分のことを考えてくれる人たちが、こんなにいるんだとそれだけで満足でした。人に恵まれ生活は一気に動き始めました。夜の移乗が家族の仕事ではなくなり、お風呂、朝の移乗、掃除と家族の負担が減っていきました。その後体制も整い、一人暮らしへと発展していきました。そんな流れをサポートしてくれた一人が今の妻であります。

結婚し子供が出来、家族で過ごしている日々を 21 年前には想像すらしませんでした。しかし、今の日常となっています。改めて考えるとなかなか面白い人生だと思います。そして今後もこの面白い人生は続いていくでしょう。また何十年後かに振り返ってみたいと思います。その時、本当に「あのときは若かった」と思うでしょう。